

エッセイコンテスト3等賞

「始まりは、不思議！」

山本京子

著書によると、齋藤先生は、ある日、神田の街から、アテネフランセに導かれた。おこがましいが、私もフランス語に呼ばれた一人だと思う。正直に言うと、合格できた大学が、たまたま仏文科だった。周囲はあぜんとした。フランス語を学ぶイメージは皆無だったらしい。なにより、今、フランス語についてエッセイを書いている自分が、一番信じられなかった。

動機はさておき、フランス語はすぐに好きになった。シャンソン「リラの花咲く頃」が、宝塚で「スマイレの花」として歌われていることにまず驚いた。その少しの差異が新鮮で、妙に気になった。今思うと、この違和感は尊い。文化の違い、翻訳や表現の壁をリアルに感じた。

大学1年の夏。文法の先生から、言葉を忘れないように、夏休みに、アテネフランセに通うことを勧められた。隣に座ったのはコックさん、お洒落なファッション関係者で、大いに刺激を受けた。大学とは違う、職業としてのフランス語の必要性、緊張感が伝わってきた。ワニのマークのポロシャツをカラフルに着こなす先生のクラス。今日は何色だろうと思いながら夏は過ぎた。のんきであったけれど、有意義な夏だった。フランス語に、はまった。その後、語学研修で訪れた Paris、La Rochelle、Amboise の景色は、心に焼きついている。現地で、うまく話せなかった悔しさが、今も学習し続けている理由の一つである。

大学院卒業後、フランス語から少し離れてしまった。忘れかけたと言っていいかもしれない。いつでも勉強できると思って、油断していた。社会人として、日々忙しく過ごしていた頃、仏人聖職者の指導教授の一言が、フランス語に引き戻した。遠回しに「不勉強」と言われた気がした。心底がっかりされていた。実際、不勉強だった。反省した。驚かせようと思って、こっそり勉強を再開。仏検1級、通訳ガイド資格、Brevet もいただくことができた。でも、間に合わなかった。夏、訃報が届いた。先生は、天に召されてしまった。crypte で最後のお別れ。「学生時代より、卒業後の方が勉強しましたね」と微笑んでくださった、と思いたい。

「ビジネスの言葉は、英語でいいです。でも、人間を語る時、その時は、フランス語であってほしい。フランス語はそのための言葉ですよ」

義務で習った言葉ではないフランス語。クラスで切磋琢磨して、langue apprise として完成させるべく、無限に挑戦したい。